

TO 病氣

藤 木 由 季 菜

電車は暗闇を走り続けていた。

晴れの日の朝でも太陽光から逃れることのできる貴重な数分間。私にとつてはそれが本数の少なく、値段も高い地下鉄の唯一、気に入っている点だった。

けれどその日はどうも落ち着かなかつた。前日の寝不足がたつて電車の揺れで酔ってしまっただけかもしれない。最初はそう思った。しかし次第に立っているだけでも怠い感じがしてきた。座りたかつたが、平日の朝、座席はどこも埋まってしまっている。周りにはこれから仕事へ向かうのか中年男性ばかり。せめて女性専用車両に乗れば良かったと後悔したが、どうせあと二駅で横浜に着く。歩き出せば気分も治るだろう。

そう思っていた時、遠くから電子音が聞こえてきていることに気づいた。だんだんだんだん近づいてくる。一瞬のうちに、私の耳は

「キーン」という音だけに支配されてしまった。それ以外の全ての音は消えてしまっている。

いや、音だけではない。それは瞬間の出来事ではあつたけれど、

その一瞬私は確かに電子音以外の全ての感覚を失つた。

やがて電子音は次第に遠ざかっていき、代わりに現実の音がゆつくりと向こうからやってくる。

「大丈夫ですか？」

何人かの慌てた声が耳に届く。何かあつたのだろうか。先ほどまで静かだった電車の中は騒然として緊張した空気が流れているようだった。しかし私はまだどこか夢のようにふわふわした不思議な感覚が残っていて状況がよく判断できない。そのうえ、目の前に広

がる世界はどうしてか白黒だった。

「十代から二十代くらいの女性が倒れています。……はい、呼吸はあるみたいですよ……」

ゆつくりと色を取り戻し始めた視界の端で誰かが車内の非常呼び出しを使って駅員に伝えているらしいところが見えた。私はその様子を古い映画のワンシーンでもスクリーンを通して観ているような気分、ぼんやりと眺めていた。

「とりあえず、座れますか？」

よいしょ、と誰かの掛け声が小さく耳に聞こえて、肩に重力がかかる。前を見ようと首を上げようとしたが力が入らない。その時になつてようやく私はどうやらそれまで自分が倒れてしまつていたらしいということに気がついた。

私が電車の中で気を失つた話をすると父と母は念の為近くの病院で診てもらつたことを勧めた。「どうせただの貧血だよ」私は笑つて返したが、父と母の顔は心配そうに歪んでいた。

窮地に追い込まれた青年ほど美しい表情をするものはないな。

M浦内科の待合室のテレビにはワールド・ベースボール・クラシック(WBC)の決勝試合が映しだされている。九回裏、日本は

韓国に一点差でリードしていた。ここで守り抜ければ日本の優勝が決まる。しかし、投手ダルビッシュはすでに二人もフォアボールで塁に送つてしまつていた。スクリーンに緊張と焦りを孕んだダルビッシュの顔が大写しになる。

待合室では受付の人も、いつの間にか早くも白衣を脱いでやつてきたM浦先生までもが固唾を呑んでテレビに入つていた。私はこれでもかとカメラが近づいたダルビッシュの美しさに別の意味で見入つていた。

次の打者は空振り三振。待合室中で張り詰められていた緊張が一瞬緩む。しかし、走者一、二塁でいまだツアアウト、油断はできない。再び打者がバッターボックスに立つと、待合室にも緊張した空気が復活した。

「藤木さん、藤木由季菜さん、診察室へお入り下さい」

おっと、いいところなのに。受付の方を見ると、さつきまでテレビに集中していた先生の姿はもうなかった。行かないわけにはいかないか。横の母に「ちよつと行つてくるね」と声をかけて腰をあげた。

昨日の事情を話すと先生は「まあ、貧血だろうねえ」と、予想通りの意見を述べ、「二応血液検査で確認しておきますか？」と、予想通りの提案をした。

このクリニックは風邪の時もインフルエンザではないか確かめるためにいつもすぐに血液検査をする。いつもは検査代が高くついてしまうので渋るところだが、今回はそれが目的で来ている。「お願いします」と、採血をしてもらった後、検査の結果が出るのを待合室で待つところだった。

席を立つと同時に背後からどよめきと落胆の混じった声が聞こえてきた。振り向くと、テレビ画面には大きく「3・3」の数字が踊っている。

「韓国、同点のタイムリーヒットです！ 日本追いつかれてしまいました！」

実況の興奮した声が流れている。なんとなく嫌な予感がした。汗まみれになりながら何かに耐え続けているようなダルビッシュの表情は、それでもやはり美しいな、と再度確認して診察室へと向かった。

診察室では先程まで待合室で一緒にテレビに釘付けになっていたM浦先生がしっかりと白衣を着て、パソコンの前に座っていた。病院独特の清潔で少しとんがったアルコールの香りが鼻につく。診察室に入った私の背後を先生と看護士さんが同時に窺っているの気づいた。

「あ……母も呼んできたほうがいいでしょうか？」

私の問いに先生は「そのほうがいい」とパソコン画面を覗き込みながら短く答えた。

「先生が母さんも居たほうがいいって……」

なるべくなんでもなく聞こえるように私は素っ気無いふうを装って母を呼んだ。待合室のテレビに集中していた母は私の方を振り向いて一瞬固まった後、ひどく狼狽して座席に置いていた荷物や上着を慌ててかき集めるようにして抱えながら診察室に入ってしまった。

「数値が悪すぎるんだよなあ」

まるで試験の成績の悪さでも咎めるような調子で先生が言うので、私はつい「すみません」と思わず謝ってしまいそうになった。ほら、とパソコンの画面を見せられたがそこには英語や数字の書かれた表のようなものがあるだけで何を表しているのかよく分からなかった。ただ、いくつかの数字が赤字で書かれていて、どうやらそれが基準値に満たない数値であることを表しているようだった。

「最も良い場合と、最も悪い場合の話をするね」

そう言いながら先生は胸の前で合掌した。それは何かの儀式の始まりのように見え、自分が深刻な事態にあるのを感じていながらも、私はなんだか可笑しくなってしまう。先生は真面目な顔で胸の前で合わせていた手をずらず、と左に移動させながら続けた。

「良かった場合、例えばたまたま今回の検査結果が間違っているだけかもしれない。……ないとは思うけれど、うちの検査機械の調子が悪いのかもしれないし。それだったら、数値が悪いのは間違いで何でもなかつたことで安心できるわけだ」

「ずずず、と合掌が右に移動する。」

「でも、もしかしたら深刻な状態だった場合、血液の大変な病気になるっているのかもしれない。例えば白血病とかね」

—— 白血病。突然ドラマや映画に出てくる悲劇的な病名を出されて、ショックを受けるよりも前に、とても現実のこととは考えられず呆然と固まつてしまった。

「だからとりあえず大きな病院でもう一度検査を受け直した方がいいと思うから、紹介状出しておきましょう。…… よろしいね?」

M浦先生の口癖は「よろしい?」だった。診察の時はいつもその台詞を繰り返すので面白くて、密かに家族で真似して楽しんでいたりしていた。そこでその日初めていつもの先生の口癖が開けたことで少しだけ安心した。

待合室で会計を待つ間は母も私も殆ど会話をすることなく、二人ともぼうつとただ座っていた。テレビの中では日本と韓国の熱い戦いが依然繰り広げられていたが、その内容は全然私の頭の中に入っていなかった。日本が優勝したことを私が知ったのは、実は翌日に

なつてからだった。

「検査の予約だけど、明日でいいですかね?」

受付から先生が受話器を片手に唐突に話しかけてきた。私と母は慌てて手帳を確認する。私は、気になっていた企業の一次試験の日で、母は弟の高校の入学式がある日だった。もう一度母と自分の予定を確認して、私は気まずい気分で言いかけた。

「あのう、明日はちよつと予定が…… 明後日にしていただけるとありがたいのですが」

しかし、母がさえぎつて言い直した。

「いえ、やっぱり明日でお願いします」

その様子を見た先生は何か勘違いしたようで、

「うんうん、今すぐ救急車で行つて輸血してもらつてもいいかもしれないけど、とりあえず今日は家に帰つて落ち着いてから、明日また検査を受ける方がいいでしょう」

と、とんちんかんな納得をして、予約の電話をしてくれた。救急車? 輸血? 私の血液はそんなに危険な状態なのだろうか。大きにかぶりを振りたい気分だった。

「それでまたどうしてこちらの病院に移つて来られたんですか?」

T病院のI医師は実に不思議そうに首をかしげた。

いや、それはこちらが聞きたいくらいですがね、と言いついた。気分を抑え、前日にがんセンターで受けた話を説明する。

M浦内科に行った翌日、私は築地にあるがんセンターで検査を受けた。そこで医師から説明された病名は「骨髄異形成症候群」という病名だった。貧血に関する病気を一通り調べていた私は、その病名は高齢者に多い病気だと思っていたので驚いた。

「とりあえず、癌ではありません。そこは安心してください。しかしこの病気は将来、白血球化する可能性もあります」

M山という医師はどこか横柄な態度でそう言った次に、その病気の説明をしてくれた。

「血液中の白血球や赤血球、血小板が減少してしまう病気です。白血球が減少すると、感染症にかかりやすくなります。赤血球が減少すると貧血などが起こります。血小板の減少では出血が止まりにくくなるなどの問題が生じる可能性があります。その原因は身体の骨の中にある血液を作り出す骨髄という場所になんらかの問題があるからだと考えられます。例えば製品を作り出す工場自体が壊れていて、出てくる製品の質がみんな悪くなってしまう状態を想像してもらえれば分かりやすいかと思います」

そこまで一息で説明された。私にはさっぱり何の話だか分からな

かったが、とりあえず頷いていた。M山先生は、今度は紙を取り出し、書きながら説明を続ける。

「次にこの病気の治療法ですが、まず、最も根治の可能性があるのが骨髄移植です。もちろんこれはかなりリスクも伴う治療法です。しかし、幸い……というか、まだあなたは若いですし、やはりこの治療を第一に考えるべきかと思えます。念の為伺いたいのですが、ご兄弟はいらっしゃいますか？」

私は、兄と弟がいることを告げた。私の後ろにいた母と父が自分の骨髄ではだめかと先生に質問する。M山医師は親と子ではHLA（白血球の型）が一致する可能性はかなり低いから、まず無理でしょう、と説明した。

「他に、治療法としては免疫抑制剤やホルモン剤での治療が考えられますが、こちらは長期でないとなかなか結果が得られませんし、薬による副作用もあります。移植ほどではないですがそれなりにリスクもかかります。また、今後の対処療法として輸血も必要になるでしょう」

淀みなく説明が続けられる。難しい言葉ばかりでほとんど内容を理解できない私の耳に「リスク」という音だけがやけに強く響いた。「申し訳ないのですが当病院では現在、骨髄異形成症候群の患者の治療は行っておりません。白血病に転化する恐れもある病気ですが

「癌ではないので、がんセンターで診ることはできないのです。せつかく来ていただきましたが紹介状を書くので別の総合病院に移っていただきます」

申し訳なさのかけらも感じられない機械的な口調で告げられた。

「T医科大学病院へ行つて下さい。あそこなら『デシタピン』という新しい薬の治験も行つています。運が良ければそれに参加できるかもしれません」

悩む時間はもたえられない様子もなかった。それ以前に選択する権利すら最初からないのかもしれない。

「あの、そのT医科大にもなんというか……血液内科の權威の先生がいらつしやるのでしょうか？」

母が再度後ろから心配そうな声をあげる。

「私は『權威』という言葉は好きではないのですがね」

医師は慇懃無礼な態度でそう返してから

「まあ、私も何度かT医科大の先生方とはお会いさせていたいただきますけど、信頼の置ける確かな方達です。安心して下さい」

その言葉は勅命のごとく天から降り注がれた。

「はあ、そうですか」

I 医師は自信のなさそうなぼそぼそとした話し方をした。

「まず、始めに言っておかなければならないのですがね、こちらの病院はがんセンターほど規模も大きくなければ医者の数もそう多くありません。ですから、がんセンターのような早急な対応を期待されても困りますので、その点ご了承下さい」

医者には、病院に期待してはいけないと言うならば、いつたい患者は、私は誰を頼りにすれば良いというのだろうか？ 呆れだとか怒りだとか虚しさだとか、一瞬様々な感情が胸をよぎつたがすぐにどうでもよくなり、私はただ「ああ、医者も色々なのだな」とだけ考えた。

『デシタピン』という治験薬が受けられる患者はもう締め切られており、その薬の効果も、もともと特定の染色体をもつ患者にしか期待できないものだということを知らされた。最初からそれほど期待していた話でもなかったが、その情報によつてその日の落胆はさらに深いものとなった。

—— 五年生存率三十パーセント。

自分の目を疑った。

医師に聞いてもよく分からなかったこの病氣はインターネットで調べてみても余計に混乱するばかりだった。原因も不明なところが多ければ予後も人それぞれ。第一、十万人に二人だとか三人だと

かが罹る程度の病気なので患者数自体元々少なく、若年ともなるとその数はさらに減ってくる。情報そのものも限られていた。

それでも探せばあるもので患者者によるいくつかのブログや本を見つけることができた。そういえば何かで世界にあるブログの三十七パーセントは日本語によって書かれているという話を耳にしたことがあった。なぜ辛い状況にありながらそれをわざわざ他人に紹介するようなものを書く人がいるのだろうか。大抵若い女性によって綴られているそのインターネット上の日記の多くは、可愛らしい背景やイラストで飾られているのに、内容は凄絶なものが多く、そのギャップが妙に不気味にすら感じられた。途中から更新のされなくなっている日記もあった。

調べよう調べようとすれば余計に分からなくなり、調べれば調べほど正体のわからない恐怖感ばかりが増していった。

—— 骨髄提供者、ドナーが見つからなければ骨髄移植はできない。

知っていた。でも、自分には関係のないことだと思っていた。

—— 骨髄移植をするためには大量の抗腫剤が必要になる。

知りたかったこと。知らなかったこと。知らなければならなかったこと。

—— 抗腫剤の副作用では髪が抜ける。

知ろうとしなかったこと。

—— 高い確率で不妊になる。

本当は知りたくなかったこと。

ああ、そうか。これが病気なのか。私はそこまで知って初めて理解できた。自分が死ぬかもしれないということはなかなか実感に結びつかなかった。けれど、もしかしたら将来妊娠できなくなる、治療を始めれば髪が抜けてしまう、ということなら起こりうる悲劇として理解できた。死ぬことはもちろん怖い。けれど、それは死ぬことよりも分かりやすい恐怖だった。

自分もブログでも初めてみようか。可愛い背景で自分の今を彩れば恐怖も和らぐのだろうか。

「二十二歳女子大生、骨髄異形成症候群です」

他人の文を真似て書いてみたつもりだったが、なんだか胡散臭い文章になった。背景をピンク色にしたらさらに嘘臭くなった。バカバカしくなって結局そこで止めてしまった。けれど、それでも、そのおかげで少しだけ恐怖は軽くなった気がした。

埼玉県にある丁医大でなら骨髄移植をする前処置で卵巣を保護して不妊になってしまうのを防ぐ治療を行っているらしい。学会で会った丁医大の血液科の医師に私のことを話してくれたと丁医師

から電話があった。

「J医大のK田先生が藤木さんのことをJ医大で受け入れても良いと言っていました。ただ埼玉では遠くて大変でしょうから移植はJ医大で行い、その後の経過はT医科大で診るということも可能です」

願ってもないありがたい話だった。私は是非にとお願いした。

いよいよすぐに骨髄移植を受けることになるのかと思っていたがJ医大で初めて会ったK田先生に勧められた治療法は免疫抑制療法というものだった。

「藤木さんの場合、血液数値は、ほぼ横這いで急激に悪化しているようではありませんし、再生不良性貧血としての症状も見られますので、多少期待できる治療法ではないかと思えます。骨髄移植に比べれば副作用もそれほど危険ではありませんし……」

「その、免疫抑制療法で効果が見られなかった時に、その後で骨髄移植をするということも可能なのでしょうか？」

「藤木さんの年齢ならそれ程問題はないと思います。うちの病院で今年移植をした患者は六人いましたが、そのうちの四人はその前に免疫抑制療法を経験している人ですよ」

しばらく悩んだが、免疫抑制療法なら特に問題が起きなければ入

院も三週間程度で良いという話を聞き、まずはその治療を受けることを決断した。正直、実はどちらでも良かった。どんな治療法を選

ぶのが正解かなんてことは医者にだつて本当のところ分からないのだろうし、私にはもつと分かるはずもなかった。

そうして、七月中旬、大学が夏休みに入る少し前に私はその治療を受けるためJ医大に入院した。

薬の影響で途中お腹の調子を悪くしたが、それ以外には特に副作用やアナフィラキシー・ショックなども起こらず。治療は概ね滞りなく完了した。しかし、副作用やアレルギーがなかったからといってこの治療が成功したかどうかはまだ分からない。このまま半年、あるいはもう少し様子を見て、私の血液数値が正常値に近づいて来なければ、その時はまた骨髄移植か別の治療法を検討しなければならぬ。

治るのか治らないのか、私はまた予想のつかない未来に対して不安を抱えて待ち続けなければいけない。

本当のことを言うと、私は今の状態より良くなっている将来の自分を想像することはできない。

思い返してみれば、私の今までの人生は成長のないものだった。

……と、言っても、もちろん多少の努力はしてきたつもりだし、その私の努力を認めて評価してくれる人たちもいた。けれど、他人からでなく自分自身で、自分を評価するならば、私は自分を成長させるほどの、自分を変えてしまうまでの力を出し、何かを成し遂げられたことは一度もなかった。

壁が目の前に立ちはだかった時、自分の力の不足を感じそうになった時、私は逃げるごときかしてこなかった。壁にぶつかっていつて、いつか自分の形が変わってしまうのではないかと思うのが怖かった。その壁をじっくり見ようとせず、壁の存在を恐れていることを他人に気づかれてしまうことすら恐ろしく、壁に近づくこともできなかった。

けれど、今度の壁から、私は逃げることはできない。壁はどちらを向いてもしつかりと私の目の前に在り続け、私の行く先を見えなくしている。

将来が見えない不安。でも、それはきつと誰もが抱えている不安なのである。

きつともしも、私がこの病気と出会っていなかったとしても、普通に大学を卒業して就職することになっていたにしても、これと同じ種類の壁が私の前には現れていただろう。

ここからは先の見えない将来、壁の向こう側へ進まなくては行け

ない。自分から壁にぶつかっていく勇氣は私にはまたない。しかし、もう、自分の目の前の壁から目を逸らすことはやめようと思う。

まずは自分の病気とちゃんと向かい合ってみよう。

「あら、そこ暗くないかい？」

看護士さんが枕元の電気のスイッチを点けてくれる。

「藤木さん小説書いているの？ すごいじゃない」

「いや、まだ何も書いてなくて……これから始めるんですけど……」

ハハハ、照れ笑いで誤魔化すと看護士さんも私のパソコンを覗きこんで、なあんだ、と呆れ顔で笑ってくれた。

まだ何も書かれていない私のパソコンの画面は蛍光灯の明かりが反射して眩しいほどに白く輝いていた。

(二〇一〇年度 卒業)